

「大谷資料館・大谷石建造物見学」を実施

実施日：平成30年11月7日(水)



カトリック松が峰教会。双塔を持つ珍しい教会建築で、国の登録有形文化財にも指定されている。

土木技術者の視野を広げ、技術向上に繋げるための異業種他分野施設見学会。今回は宇都宮の「大谷石^{おおやいし}」について、その採掘の歴史を学ぶ。資料館と巨大な採掘場跡の見学、そして大谷石が実際に使用されている建造物を巡るツアーである。

宇都宮と大谷石の長い歴史

2018年11月7日(水)、当会は異業種他分野各種施設見学会を開催。今回は栃木県宇都宮市の名産品である「大谷石」を巡る見学会だ。

大谷石とは、宇都宮市北西部の大谷町付近で産出する石材のこと。およそ1,500万年前の海底火山の噴火の際に火山灰や砂礫が海中に堆積、凝固して生まれた凝灰岩で、軽くて耐久性に優れ、加工がしやすいという特長を持ち、古くより建材として使われてきた。昭和40年代には採掘事業場が約120カ所、年間出荷量も約89万tにまで増加するなどピークを迎える。その後、出荷量は減少していくが、最近では宇都宮の名産品として知名度が上がり、コースターや置物などが土産物屋に並ぶようになった。

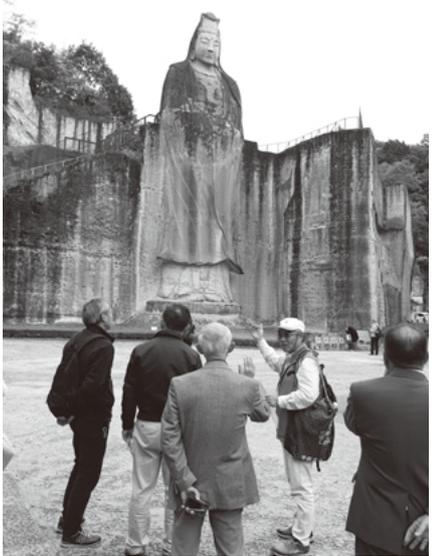
見学会当日、大型バスは40名の参加者を乗せ、午前11時頃に宇都宮の市街地に到着した。バスを降りると、

(一社)うつのみやシティーガイド協会の永井進さんと大塚則夫さんが出迎えてくれた。今日一日、大谷石関連施設を案内してくださるとのことだ。

心強いガイドと共に一行がまず訪れたのは、東武宇都宮駅にほど近い、カトリック松が峰教会だ。この教会は1932(昭和7)年竣工のロマネスク(ローマ風)様式。建物自体は鉄筋コンクリート造(一部木造)だが、



カトリック松が峰教会の祭壇。長方形の大谷石が立てて並べられるなど、その特長を生かしたオリジナルな意匠となっている。



左／大谷公園の巨大な平和観音。ガイドの大塚さんが造立経緯を説明してくれた。
上／大谷寺(大谷観音)の観音堂と、その上に鎮座するかのような巨石(自然石)。

建物の内外壁には厚さ5～10cmほどの大谷石が張り付けられ、コンクリート地を覆っている。各所には細かい意匠も施されている。大谷石は柔らかく、細かい加工が可能で、またモルタルとの相性が良いため、このように仕上げ材として使われているのだ。

松が峰教会の向かいには、大谷石で造られた築70余年の蔵をリノベーションした食事処がある。大谷石の建物は市内に約900棟あり、この街を注意して歩くとたくさんの大谷石に巡り会えるとのことだ。

採掘の中心地・大谷地区を訪ねる

宇都宮の市街地を見学した後は、大谷地区へ移動。「屏風岩石材 石蔵」という名の立派な石蔵や、大谷石で作られた塀、また加工した石材を運ぶために使われていたトロッコの駅舎ホームなど、かつての面影をたどりながら大谷街道を歩く。

目的地は大谷公園。採掘で削り取られた大谷石の岩壁に圧倒される空間だ。ここでは、太平洋戦争の戦没者を弔うため、そして世界平和を祈願するために、大谷石の岩壁に大谷の石工たちが手彫りで作ったという、高さ約27mの平和観音を拝むことができる。

大谷石を切り出してできた切通しを抜けて公園奥に進むと、弘法大師が810年に開基したと伝わる大谷寺(大谷観音)が鎮座する。観音堂の上には穴の空いた巨石があるが、これは自然石で、この石を削り掘って観音堂をつくったという。観音堂には、大谷寺の本尊である千手観音が、その自然石の岩壁に直接彫られており、これは日本最古の石仏とされる。また遺跡調査から、この地が縄文・弥生時代から集落だったこともわかっている。

大谷寺を出て、最後の見学施設である大谷資料館へ。ここは実際の採掘場跡を見学できるよう整備された施設で、大谷石の採掘の歴史がわかる資料展示もされている。地下に降りていくと現れる巨大な地下空間は、



ガイドの永井さんの先導で、大谷資料館内の採掘場を見学。その空間のあまりの大きさに思わず天井を見上げる。

まるで地下迷宮だ。広さ2万m²、最大深さ30mの巨大空間。つるはしで職人たちが大谷石を掘り出した跡が壁に残る。1960(昭和35)年頃からは機械で掘り出すようになるが、その機械による切り出し跡もそのまま残っている。この採掘場が資料館になったのは、ひび割れなどがほとんどないなど、とにかく安全だったからだ。今や宇都宮の新しい観光の顔となり、2017年は年間の入場者数が40万人を超えた。

今回は大谷石ゆかりの地を巡る見学会であった。教会、蔵、寺、そして資料館とバラエティに富んだ見学内容で、宇都宮の歴史にも触れることもできた。参加者からは「ガイドさんの説明で、普段気付かないようなところも興味深く見学でき、とてもよかった」という声も聞こえてくるなど、一同大満足で帰路についた。

写真：中原一隆